

# 高橋温子先生へのスミス・カレッジに関するインタビュー —伝統、風土、日本との比較—

An Interview on Smith College with Ms. Atsuko Takahashi :  
Traditions, Climate, and Comparison with Japan

高橋 温子\* ・ 安東 由則\*\*

TAKAHASHI, Atsuko & ANDO, Yoshinori

## 目次

はじめに

1. 高橋温子先生の経歴とアメリカでの就職
2. スミス・カレッジについて
  - (1) スミス・カレッジの学風・雰囲気
  - (2) スミス・カレッジのカリキュラム履修
  - (3) その他の特徴
3. スミス・カレッジの強さ・長所
  - (1) 入学者選抜
  - (2) 資金集め／卒業生らの寄付
  - (3) パイオニア精神／ロールモデル
  - (4) 授業のあり方：総合研究大学との比較
  - (5) 基礎教育のあり方
  - (6) 卒業生 (Alumnae)
4. 日本の女子大学とスミス・カレッジの比較
  - (1) 女子教育に対する意識
  - (2) 大学卒業後に描く女性の将来像
  - (3) 日本での女子大学生生活を振り返って

\* Senior Lecturer at Smith College

\*\* 武庫川女子大学文学部教育学科・教授／教育研究所・研究員

## はじめに

安東 西宮市にあります、武庫川女子大学教育研究所の安東由則と申します。科学研究費の助成を受けて、日米韓の女子大学の比較研究を行っておりまして、その一環としてアメリカの女子大学の事情や取り組みについてお聞きいたします。

この研究の目的は、女子大学をめぐる状況が厳しくなっているなかで、既存の女子大学はどのような方策で生き残りを図ろうとしているか、さらなる魅力づくりをしようとしているのかを明らかにし、情報を広く提供していこうということです。

日本でも女子大学は厳しいと言われ、最大であった98校からは数も減ってきていますが、現在77校あって全大学数の1割を占め、ある意味、まだ根強い人気があります。“女子大人気の復活”といった言葉が週刊誌で踊ることもあり、最近では“就職に強い女子大”などと言われて注目されています<sup>1</sup>。一方、アメリカの女子大学は、最近もペンシルバニア州ピッツバーグにあるチャタム (Chatham University) が共学になったり、ヴァージニア州のスウィート・ブライア (Sweet Briar College) が共学化阻止で騒がれたりして、状況は日本と比べて厳しいように感じます。2011-12年には44校でしたが、今は40校を割り込み、37校くらいになっているようです<sup>2</sup>。

高橋 日本ではまだそんなにあるのですか。アメリカの女子大学ではCo-ed (共学) になるところが増えてきましたね。そうした状況にあって、伝統ある大学は頑張っていて、中でも、スミス (Smith College) は積極的に打って出ていると思っています。何年か前にエンジニアリング (Engineering)、工学部を作り、こんなに集まるのかというほど志願者があり、結構、話題を集めています。

安東 高橋先生は、日本女子大学を卒業され、今はアメリカを代表するスミスカレッジに在職されており、日米双方におけるトップの女子大学を経験されているわけです。スミスカレッジの取り組みとともに、日米の比較を含め、先生の率直な経験を語っていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

## 1. 高橋温子先生の経歴とアメリカでの就職

安東 最初に、高橋先生が、スミスに来られるまでの経緯についてお聞きします。

---

<sup>1</sup> 「名門女子大復活の理由就職力 今の経済状況に合致」『週刊朝日』(2013年2月24日)、「面倒見、就職率…見直される女子大の教育力」『サンデー毎日』(2014年10月27日)、「冬の時代に“薄日”復活の兆し? 女子大志願者は微増」『週刊朝日』(2016年2月26日)

<sup>2</sup> 2011-12年 (academic year) の数字は、安東由則 2014「アメリカにおける女子大学のプロフィール」(『研究レポート』44号、pp.59-88)を参照。今日の数字はWomen's College Coalition HP掲載のアメリカの女子大学を参照。39校が掲載されているが、共学と定義される大学も含まれているので、数はさらに減少して37校程度になる。(http://www.womenscolleges.org/)

※ネット資料は2018年2月27・28日に全て再度確認 (以下、同様)。

高橋 私はもともと日本女子大学の被服学科を卒業して、本当はアメリカではなくイギリスのほうで衣料関係、デザインなどの大学院へ行くつもりで大学院を受けていたんです。しかし、途中で興味はもっと別のほうにあるかなと思うようになり、異文化間コミュニケーションを勉強したくなっていきました。当時、90年代中頃だったのですが、アメリカのほうでそうした研究が進んでおり、またその領域に関連した大学院を持っていたので、アメリカに生まれて、異文化を勉強できる大学院に入ったわけです。

安東 どの国の、どの大学に行くか、選択や決断するのがなかなか大変ですね。

高橋 そうですね。研究の方向性が異なったことと、イギリスとアメリカとでは英語の試験を含めシステムが全て違いましたので、もう一回やり直しでした。

安東 どちらの大学院に行かれました？

高橋 ペンシルバニア大学 (University of Pennsylvania) です。

安東 では、90年代半ばからもうずっとアメリカにいらっしゃるわけですね。

高橋 そうです。ペンシルバニア大学でちょっと教えさせてもらった後、スミスには2004年に来ましたので、もう13年です。長いですね。

安東 大学の職に応募 (Job Hunting) される際、先生は初めからスミスが第一希望でしたか。その他、いくつかの大学に応募しておられましたか。

高橋 スミスとどこの大学に出したか確かなことは覚えていないのですが、3つか、4つぐらい出したと思います。それで結局スミスになりました。

スミスからオファーをもらって、他の大学からのオファーをもらうかもらわないかのうちに返事をしなければならなかったんです。本来なら比べてから決めるのですが、時期的に難しいことがありまして、「もう決めよう」と思って決断したのかもかもしれません。確かスミスはビザ (Visa) を出してくれるということでしたから、「もう行きます」という感じでしたね。ペンシルバニア大学の先生方もスミスはとてもいい大学だから絶対そこに行って後悔はないからと言われて来ました。

あとは移動しやすさでしょうか。(ペンシルバニア大学がある) フィラデルフィアからここノーサンプトンであれば、車でも引っ越しできそうな距離だったので、スミスに決めました。あまり深く考えていなかったのかもかもしれません。

スミスが女子大というのも、私が女子大出身だったので、抵抗もありませんでした。「大体わかる、いいんじゃないかな」と思って動いたのだと思います。初めは契約も余り長くないということで、そういうつもりで生まれて、その後、契約が延びていき、今に至っています。

安東 契約というのは、最初は1年とか2年という期間で行うのですか。

高橋 そうですね。3年が多分一番長いと思いますが、テニユア (Tenure) でない限りは

大抵、1年か2年と仕事の期間が決まっています。

安東 あとは更新していくわけですね。

高橋 更新できるポジションもありますし、絶対に更新できないものもあります。例えば、誰かが戻ってくる場合、更新はないです。また、期間が決まっていない場合など様々なケースがあります。

## 2. スミス・カレッジについて

### (1) スミス・カレッジの学風・雰囲気

#### <第一印象>

安東 就職としてはペンシルバニア大学の次に、スミスに来られたわけですが、最初の印象はいかがでしたか。

高橋 最初の印象はとて小さい大学だというのがありました。本当に、皆がまとまっていて、教員やスタッフの人たちも優しく、丁寧な方々が多かったです。それがすごく印象的でした。ペンシルバニア大学という規模が大きなところから来たので、キャンパスもまとまっている感じでした<sup>3</sup>。女子学生たちは皆、キャンパスに住んでいます。

安東 ほとんどの学生が4年間住むのですか。

高橋 そうです、ハウス（House）と呼ばれるコテージがたくさんあり、学生はそこに住んでいます<sup>4</sup>。ペンシルバニア大学にも大きな寮があるのですが、スミスの学生はほとんど全員が4年間、キャンパスに住んでいます。他には、いろいろな伝統行事があり、女子大学の伝統みたいなものをずっと守っているのが面白いなと思いました。

日本女子大学も、私がいた頃は昔の伝統をそのまま守っていました。キャンパスの中に寮があって、私はそこに住んでいたのも、ハウスに住んでいるスミスの学生たちの気持ちがとても分かるんです。ハウスにもルールがあり、しかもそれぞれのハウスで違うルールがあって、「ああもう大体こんな感じかな」というのが分かります。

#### <リベラルな学風：トランスジェンダーへの対応>

安東 学長は女性ですが、やはり、教員やスタッフも女性が多いのですか。

---

<sup>3</sup>ペンシルバニア大学のHPによると、2016年秋現在、学部、大学院のフルタイム学生数は、10,468人（学部）、10,890人（大学院）である。（<http://www.upenn.edu/about/facts>）

<sup>4</sup>スミス大学には35（あるいは37）の寮（Houses）があり、学生自治で運営されている。（<https://www.smith.edu/reslife/houses.php>）

<sup>5</sup>*Barron's Profiles of American Colleges 2017*によれば、女性教員の割合は55%と高い水準である。12名いるPresident CabinetのVice Presidentのうち、女性は9名、男性3名。（<https://www.smith.edu/president-kathleen-mccartney/cabinet>）

高橋 そうですね、女性が多いと思います<sup>5</sup>。また、スミスには同性愛者が多いですね。学生にも同性愛の子がいますし、働いている方にも同性愛の方が多いです。最近ではトランスジェンダー (trans-gender) といって、入学してきたときは女性なんだけれども男性になりたいというので、男の人になった人も働いています。学生の中にもトランスジェンダーの人はいますね。

安東 反対のパターンはどうですか。生まれは男性なんだけれども女性になった、あるいは女性としてのアイデンティティをもっているという人も入ってこられるんですか。

高橋 2015年秋の入学から、スミスではトランスジェンダーの入学が許可されるようになっていて<sup>6</sup>。受け入れるように方針が変わった当時、プロテストなどの活動があったことを覚えています。ただし、入学の時点で、女性の身体であってもアイデンティティが男性である場合には、入学許可がされないようです。個人の性的意識を尊重した結果だと思います。

安東 今、いろいろと話題になっていますね。

高橋 そうです。アメリカでも、これからどうなるかと話題になっています。

安東 トランスジェンダーの学生の受入れは、他の伝統校ウェルズリー (Wellesley) やマウント・ホリヨーク (Mount Holyoke)、ブリンマー (Bryn Mawr) なども、同じような対応なのでしょう。

高橋 確か、他の大学も同じようなルールをつくったはず<sup>7</sup>。つい最近のことで、マスコミにも大きく取り上げられました。

スミスは特にその辺にはすごくりベラルですから、学則 (regulations) の表記も変化しましたね。何年か前まで、スミスの学則では主語が全て “she” でした。スミスの学生についてのステートメント (statement) では、“she is…” というように、全部 “she” で始めていたのです。それが学生側から問題が提起されていきました。身体的には女性であっても、中にはやはり自分のことは “he” だと思っている人もいるから、“she” ばかりではなくすべきだと主張して、その結果 “she” でも “he” でもなくて “student” に変わりました。そうするとニュートラルになりますから。ですから、スミスの学生の規約、宣言みたいなものは全て “student” に書きかえられたはず<sup>8</sup>です。

安東 それは、トランスジェンダーのトピックと同じく、割と最近のことですか。

高橋 表記の変更はもう 10 年近く前、2006 年か 2007 年の話だったと思います。

---

<sup>6</sup> May 2, 2015 に出された “Admission Policy Announcement” に示されている、(<https://www.smith.edu/studygroup/>)

<sup>7</sup> Transgender の学生への対応については、Simmons や Mount Holyoke、Mills の方が早かったようである。2015 年から、Bryn Mawr、Wellesley、そして Smith も受入れを始めた。(<http://thinkagaintraining.com/wp-content/uploads/2015/08/Comparison-of-Womens-College-Trans-Policies.pdf>)

### <スミティーズ (Smithies) の形成>

安東 スミスの学生の様子、雰囲気などはいかがでしょう。

高橋 私はスミスの学生の雰囲気、すごく好きです。学生は大学に入ってきて、最初の1学期でスミスのペースに慣れて、馴染んでいくのですが、学生にとってその変化はすごく大きいようです。大学の授業や大学生活において、自分に何が求められ期待されているのか、自分が何をすればいいのかが分かってくるというのでしょうか。それを最初の学期で身につけて、その後、スミス独自の伝統行事などに、一緒に参加しながら覚えていき、1年ぐらい経つとスミティーズ、つまりスミスの学生になっていくという感じがします。

安東 スミティーズというのは、どんな綴りですか？

高橋 S-m-i-t-h-i-e-s. Smithy の複数形で、学生は皆、自分たちのことをスミティーズ (Smithies) と呼ぶのです。それはもう校風というのでしょうか、勉強も日常生活もこういうものだというのがだんだん分かって、身につけていきます。学生は皆、本当に一生懸命やりますね。この時代、女子大学を自ら選んで入ってくる学生というのは、きっと何かそれなりの考えを持っているというか、そういう性格をもっているんだと思うんです。

先生方も、スミスで女子学生を教育している、女子教育をしているという意識をすごく強く持っていると思います。男性の教授陣もちろん同様で、この大学に何年かいるうちに、女子教育に徐々に入っていくような感じがします。

安東 そうですか。そうした教員の取り組み方や雰囲気は、やはり校風というか伝統といったものでしょうか。新任の先生に対して、“スミスではこのようにしてください”といったことは特別に伝えないのでしょうか。

高橋 そうしたことはないですね。確か、私が来たときの最初のオリエンテーションで、新しく入ってきた先生方に対して、1日がかりでどっぷりスミスについて学ぶオリエンテーションがありました。そこでスミス大学の教育の理念であるとか、スミスの歴史、学生の特徴といったものは、そこで教えてもらいました。

安東 それくらいなんですね。

高橋 そうです。でも、何年もあるうちに何となく分かってくるものもあると思います。私も最初の1年ぐらいで、伝統や様々な行事、指導のあり方など「ああこういうことか」と分かってきたことがありました。先の“Smithies”という意味も、「ああこういうものか」と理解できたような気がします。

安東 例えば、その“Smithies”の意味は、どのようなものだと感じられましたか。

高橋 学生がすごく一生懸命に勉強するということがありますし、自分の意識の持ち方というか、女性でも何かやろうとする意識みたいなものがあると感じましたね。何が



“Smithies”とさせているかというのはすごく難しいのですが、やはり学生の中に何かしらの意識ができてくるんです。ただ勉強をしているというわけではありません。

安東 表現しにくいとは思いますが、どんな意識なのでしょう。

高橋 そうですね、卒業した後、社会に出ていこうという意識が強いということですね。皆、卒業後に「こんなことをやりたい」という意識を持っているような気がします。学生たちはすごいフェミニストというわけでもないんです。中にはもちろんそうした人もいますが、全体的な雰囲気としては、男性に敵対するといったフェミニスト的なものではないようです。自分を大切にしながら何とかやっていきたいという意識・気迫を感じます。もちろん、学生にもよりますが、全体的に皆、芯を持っている感じがします。

とはいうものの、やはり主張は強いです。今回の大統領選でドナルド・トランプ (Donald J. Trump) が大統領に決まった選挙の後、スミスの学生の落ち込みようはすごかったらしいです。私は産休だったのでキャンパスにいなかったのですが、その時のことを先生方に聞くと、選挙の翌日は、クラスには出てくるんですが、皆、すごく暗かったり、泣いていたりする学生もいたということでした。

安東 ウェルズリー (Wellesley) についてもそのような記事が出ていました<sup>8</sup>。あそこは大統領に最も近いと見られていたヒラリー・クリントン (Hillary R. Clinton) の母校で、母校から初めての女性大統領が生まれると確信していたでしょからね。

高橋 そうですね。でも、当時の様子は、本当にすごかったみたいです。社会的なトピック、例えば人種差別だったり、性的差別だったりとか、そういうことに関してはキャンパス全体がすごく敏感というか、みんなプロテストに出ていたりする学生も多いですよ。社会的な問題に関心が高く、何かあれば黙ってはいないという感じがしますね。

## (2) スミス・カレッジのカリキュラム履修

安東 カリキュラムについて伺います。スミスはリベラルアーツ・カレッジ (Liberal Arts College) で、基本的に教養教育ですから、前半の2年で幅広く学び、3年生以降で主専攻と副専攻をとるという形ですね。

高橋 そうです。

---

<sup>8</sup> Wellesley Magazine (<http://magazine.wellesley.edu/winter-2017/after-the-election>), the Guardian アメリカ版 (<https://www.theguardian.com/us-news/2016/nov/09/hillary-clinton-wellesley-college-election-party>), Boston Globe (<https://www.bostonglobe.com/metro/regionals/west/2016/11/09/even-defeat-clinton-beacon-for-wellesley-college-students/dgFo4LQ0F8igvCXXK9yFVvJ/story.html>)

安東 先に、数年前にスミスは積極的に打って出てエンジニアリング (Engineering)、工学部をつくり志願者を集めていると言われましたが、リベラルアーツ・カレッジに工学部というのは、違和感があります。日本のリベラルアーツ型大学として、国際基督教大学があり、そこでは教養学部のみであり、3年からは主専攻に分かれるという形です。工学部と呼ばれるということは、主専攻が学部のようにかなり独立性が高く、主専攻によって教員団が分かれていると考えていいのですか<sup>9</sup>。

高橋 はい、メジャー (主専攻) によって教員団は完全に分かれていますね。リベラルアーツでは、専門が入ってくるのは基本的には3年生からですが、もし本当にエンジニアリングにかなり興味があるのならば、もう1年に入ってきた時点で、そちらの寄りのコースを取り始めたりしています。履修でそういうアドバイスもしますが、基本的には1、2年のうちは広く科目をとっておいて、2年生の半ばあたりで学部を決めなければいけないのです。その辺で学生は、専門のコースをとる自分のデザインができるようになってきます<sup>10</sup>。

安東 スミスには主専攻、副専攻ともに、かなりの数がありますね。

高橋 スミスには主専攻と副専攻がそれぞれ50程度あります<sup>11</sup>。

安東 例えば主専攻で数学をとって、副専攻で言語学とか社会学をとることもありますね。そのとき、学生は主専攻に対して学部というような意識があるのですか。ちょっと日本と感覚が異なるので、分かりづらいのですが。

高橋 主専攻と副専攻を、それぞれメジャー (Major) とマイナー (Minor) といいますが、学生としてはメジャーの方への所属意識が強いですね。マイナーでこれを取ったという意識はあると思いますが、「専攻は何ですか」と聞かれると、皆、メジャーを言います。リベラルアーツのキャンパスにいる限りは、メジャーというのは、やはり学部という意識があります。卒業した人は履歴書などには、メジャーを書きます。Mathematics や Engineering、Arts、East Asian Language and Culture などですね。

スミスで面白いのは、当然メジャー (Major) の授業を中心に行ってはいませんが、この他、マイナー (Minor) と呼ばれる副専攻に加え、もう一つコンセントレーション (Concentration) というのもあるんです。

安東 マイナー、副専攻というのは、近年、日本の大学でも取り入れている大学が、少し

---

<sup>9</sup> 高橋先生によれば、「主専攻をオファーするという意味では、学部もプログラムも主専攻をオファーしているのですが、学部=主専攻とも言えないのです。これがスミスのややこしいところですよ。」(Sept.23,2017のE-mailより)。安東の認識が正確ではない可能性もある。

<sup>10</sup> スミスの場合、科目選択の幅が非常に広く、全学で必修とされるものは1年時で設けられている Academic Writing を含む、一つか二つの科目に過ぎない。

<sup>11</sup> 2017年秋現在、スミスには主専攻が45、副専攻は54ある。



ではありますが増えてきているようです。メジャー（主専攻）を強化したり、学びの幅を広げたりするために、副専攻として提供される異なる分野のプログラムを取るといえるものですね。例えば、経済学を主専攻として、近接領域の法学をとって強化したり、あるいは副専攻に全く異なる領域の物理学を取って幅を広げるなど。主専攻よりも単位取得の負担は軽くなっている。そういう理解でよろしいでしょうか。

**高橋** はい、そのような理解でよいと思います。提供されるプログラムは非常に多様で、学部間でも様々な組み合わせられたプログラムが提供されています。

例えば私は、スミスで東アジア言語学部（East Asia Languages & Literatures）に所属しており、学部がいくつかのプログラムをメジャーやマイナー用に提供していますが、この他に東アジア研究（East Asian Studies）という別の学部（主専攻）のプログラムがあり、東アジア言語学部の教授の中には、そこにも参加している人もいます。そのプログラムは、学部単独のものではなく、社会学や歴史学、政治学、さらには人類学や宗教学といったソーシャルサイエンス（Social Sciences）系の先生方が、それぞれ歴史学部、政治学部、文学部などから出てきて授業を行うもので、分野横断的に作り上げているプログラムです。このプログラムのために特別なコースを教えているというわけではなく、例えば歴史学部の中で既に提供されている日本の歴史コースが、東アジア研究プログラムでも Cross Listing として提供されているのです。つまり、メジャーであれマイナーであれ、東アジア研究プログラムを専攻する場合には、歴史学部、宗教学部、文学部、政治学部、人類学部などにまたがって、それぞれの分野で東アジアに関するコースを履修していくことになります。プログラムをとった学生は、学部に拘束されることなく、東アジアについて社会科学分野における総合的な学習ができるというわけです。

**安東** 他の学部から先生方が来て、学部とは異なるプログラムをつくるんですね。

**高橋** もちろん中国文学を教えている先生、日本文学を教えている先生もそのプログラムのメンバーには一応なりはしますが、そうした先生方は基本的には文学部などの所属学部から出てくるんです。

もう一つ特徴的なものとして、コンセントレーション（Concentration）<sup>12</sup> があります。スミスには幾つかコンセントレーションがあるのですが、例えば“Translation Study（翻訳）”のコンセントレーションの場合も同じように、いろんな学部から先

---

<sup>12</sup> コンセントレーションは、Major、Minor、Certificate のコンビネーションの履修（卒業必修）に付け加えられるプログラムで、現在 10 ある。このプログラムは、学生らの知的で実践的な経験（関心分野におけるインターンシップ、サービ斯拉ーニング〔社会貢献活動〕）を組織（統合）する方法を提供しようとするものである、との説明がされている。（<https://www.smith.edu/about-smith/class-deans/majors-minors>）

生方が集まって、学生がその先生たちが教えているクラス、コースをとっていきます。“Book Studies”、“Museums”、“Global Financial Institutions”、“Environmental Concentration : Climate Change” などがあります。

それはマイナーでも、メジャーのプログラムでもないんです。マイナーやメジャーといった専門分野ではカバーしきれない、より複合的で統合的なテーマを設定して、様々な分野から取り組んでいるようです。例えば、フランス文学を専攻にしている学生が、“翻訳”のコンセントレーションを取る組み合わせはできます。しかし、コンセントレーションは、サーティフィケート (Certificate) を出せますが、これだけでは卒業できません。

**安東** なぜそうした、一見複雑に思えるカリキュラムをつくるのでしょうか。

**高橋** 大きな枠組みについては、上のカリキュラム・コミッティーの人たちが動向を見ながらつくっています。こういう講義と実技の組み合わせが今、必要とされているとか、他の大学でもそういうものが行われていて成果を上げているとかですね。もう一つは、こういったものを作ってはどうかという話が下りてくると、ある範囲の教員たちが集まって、「じゃあこんなのをつくったらどうか」というアイデアを出し、それを大学の上のほうに持っていきます。そして上がアプルーブ (Approve : 是認) すればそれがカリキュラムとして成立するわけです。スミスでは学部としてオファーできないものもありますから、そうしたものをコンセントレーションという形で出すといった意図はあると思います。

**安東** そうした授業とは別に、スミスには The Jill Ker Conway Innovation & Entrepreneurship Center や Wurtele Center for Work & Life Programs があって、例えば、Financial Education のコースの授業なども提供されていますね。

**高橋** センターが行っているものなので、あれはコンセントレーションではありません。そうしたセンターでも様々なコースを出しているのですが、それらは経済学部の教授や専門職に就いている卒業生などによって、コースを形成しているようです。

**安東** HP を見ますと、The Poetry Center、Center for Women in Mathematics、Jandon Center for Community Engagement、Lazarus Center for Career Development、The Smith College Center for Early Childhood Education、the Spinelli Center for Quantitative Learning など、実にたくさんのセンターあります。

**高橋** 多いですよ。Global Studies Center もあって、本当に様々な分野のものがありますね。あとは Design Thinking Initiative というものも 2015 年にできました。こうしたものが、通常の授業とは別に、本当に多様なプログラムを提供しています。

### (3) その他の特徴

#### <伝統行事>

安東 その他、スミスの特徴的なことについて伺いたいのですが、先ほど、伝統を重視していると言われました。それは House についてですか、それとも大学全般にということでしょうか。

高橋 大学自体も伝統がありますし、House にもそれぞれ伝統があります。それぞれの House が、自治集団というわけではありませんが、やはり自治があるんです。ですから、それぞれの House には、その House 独自の伝統みたいなものが受け継がれています。

大学にもいろいろと行事があり、伝統を守ってやっています。本当にいろいろあるんです。面白いものだとマウンテン・デー (Mountain Day) といって、9月から10月初めのすごく天気がいい日に、学長が突然、学校を休校にしてしまうんです。それはスミスの伝統で、天気がいい日にみんなでピクニックに行きなさいということなんです。

安東 マウント・ホリヨーク・カレッジにもありましたね。書物で読んだことがあります。

高橋 そうです、マウント・ホリヨークから始まったようです。それをスミスでもやっていて、今もずっと続けています。その他に伝統的なものでは、卒業式の前にアイビー・デー (Ivy Day) というのがあり、そのときはみんな白い服を着て、キャンパスでマーチ (March: 行進) をするんです。参加するのは卒業生だけなのですが、そういうものも伝統の1つです。他に、ラリー・デー (Rally Day)<sup>13</sup> などもありますし、細かいものを入れると、本当にいろいろあるんですよ。学生はそうした情報をよく知っています。

安東 学生たちがギリシャ語の文字を使った社交団体を形成するソロリティ (Sorority) やフラタニティ (Fraternity) といったものはありますか。

高橋 フラタニティは男子の団体ですではありませんね。ソロリティもスミスにはないんです。ペンシルバニア大学には、男子学生のフラタニティと女子のソロリティがありましたけれども。小さな規模の女子ばかりの大学ですし、たくさんの寮をもっているのも、もしかすると要らなかった、あるいは作らせなかったのかもしれないです。でも、学生でつくるグループ、団体は様々にあります。

---

<sup>13</sup> もともと、建国の父である初代大統領ワシントンの誕生日を祝う日であったが、今日では4年生が初めてガウンを公的に着てもよい日であり、趣向を凝らした帽子をかぶってガウンを着用する。主要の行事は、社会的に、そしてスミスに貢献したそして卒業生に対してメダルを贈呈することで、2017年2月には5名の卒業生に授与された。1日を通した祝祭の日となっている。(https://www.smith.edu/about-smith/college-events/rally-day)

### < 宗教的行事・雰囲気 >

安東 教会もあります、キリスト教の宗派的な影響というのはあるのですか。

高橋 教会はありますけれど、宗教的なものを感じたことは余りないですね。

ペンシルバニア大学では、ジューイッシュ (Jewish) が多かったので、ユダヤ教の雰囲気、影響のようなものは感じました。例えば、ユダヤ教のお休みなどがあれば、先生方それはリスペクトすると言いますか、学生がそうした行事や慣習で何かできなくなったのであれば、それに関しては先生の方で理解してあげてくださいといったことがありました。ユダヤ教であれば、学生それぞれ、「私はすごく従順なユダヤ教徒であるから、そのために私はこの日は鉛筆を持ちません」であるとか、「授業にも来ません」、「私はクイズ (試験) も受けません」、あるいは「この日は何もしない日です」というものなど、いろいろとあるんです。

スミスでも、もちろんユダヤ教や他の宗教の学生もいるのですが、ペンシルバニア大学のような大学全体で特定の宗教を尊重してあげてくださいといったものはありませんね。ただペンシルバニア大学の場合、歴史的にユダヤ教徒が多いといった理由もあってそのようになっていますが、宗教的な差別をしているようなことはありません。スミスでも、例えば、イスラム教の学生が「今日から断食が始まりますから」などと個人的に教師に言いに来れば問題はないと思います。全体的にこれといった宗教色はないですが、個人個人の宗教を尊重する姿勢が根底にあります。

安東 特にアメリカは宗教の国ですから、その大学や大学町の歴史などにより、宗教とは様々なスタンスの取り方がありますね。

高橋 不思議ですね。大学によっては宗教色がすごく強いところもあると思います。

安東 私は以前、1年だけワシントン D.C. のジョージ・ワシントン (George Washington) 大学に客員研究員として在籍しておりまして、その近くにアメリカで最も古いカトリック大学であるジョージタウン (Georgetown) 大学がありました。そこでは、イースター (復活祭) やクリスマスなど、宗教的な節目には、人形などが飾られていました。

高橋 イースター (Easter) の日を、休みしたりしますよね。

安東 はい。宗教活動やチャリティーなどの学生団体がいくつもあって、それが割と盛んに活動していました。ジョージ・ワシントン大学では何もなかったようですが。

高橋 あまり考えたことがなかったのですが、言われてみればスミスにはそれはありません。割とアメリカでは宗教色が強いところもあって、本当に強いところは大学全体でお休みになったりとか、イベントを行ったりとかありますね。

### < エスニシティ / 出身地 >

安東 エスニシティ (ethnicity) は、白人が多いのでしょうか。

高橋 そうですね。全体的に白人が多いですね<sup>14</sup>。

安東 やはり東部からの人たちが多いのでしょうか。全米のいろんなところから集まってきたとは聞いていますが。

高橋 そのようですね。地理的に言えば多分東部のほうが多いのかもしれないですけど、全国から来ていると思います<sup>15</sup>。私の周りでも、カリフォルニア（西部）やテキサス（南部）、あとはオハイオ（中西部）の辺から来ている学生たちもいます。ただ、エスニシティはやはり白人が多いのではないのでしょうか。

安東 近年は、中国人がかなり増えてきたようですね。

高橋 そうなんです。この間も、アドミニストレーションのスタッフのほうで、いろんな人種やエスニシティの学生を増やそうとしているグループの集まりがあり、私も出席しました。そこに学生も呼ばれていたんですが、たまたま私の前に座った学生たちは、アジア系でおそらくベトナム系アメリカン、もう一人はインドではなくパキスタンの辺りから両親が来た学生でした。話している英語はネイティブだから多分アメリカ人なんですが、人種的には色がついているわけですね。マイノリティーだと思うかと聞いたら、「うん、そうだ。自分たちはマイノリティーだ」と言っていました。

安東 彼女らは留学生ではないですよ。

高橋 留学生ではないですね。両親が移民で、彼女らはアメリカで生まれ、家族で初めて大学に入学するファースト・ジェネレーション（First Generation）だと思います。

安東 そうしますと彼女らは、スカラシップ（Scholarship）をもらいやすいですね。

高橋 そういう人たちはもらえますね。アメリカ国籍があればということですが。

安東 今、そうした移民の子である学生は、トランプ大統領の政策の影響は気になりますね。

高橋 トランプのアドミニストレーションが、何らかの形で移民に対する排他的な大統領令を下したとしても、大学の中では、その国から来た学生のビザだとか籍は守ろう、強制送還はさせないぞという、学生を守るための署名活動を、1月末に行いました。一部の国々からの入国を禁止する大統領令が出た後すぐ、署名が回ってきました。

#### <在学中の留学／大学院への進学>

安東 学生の留学や卒業後の大学院進学についてはいかがでしょう。

高橋 留学についてはたくさんのプログラムが用意されており、半数近い学生が卒業まで

---

<sup>14</sup> *Barron's Profiles of American Colleges 2017* によれば、White46%、Asian13%、Foreign13%となっている。

<sup>15</sup> HP の “At A Glance” によれば、全米 50 州中 48 州、68 カ国より学生が集まっている。(https://www.smith.edu/about-smith/smith-glance) 2017 年 8 月 31 日アクセス

に留学をしているようで、活発です。だいたい、メジャーを決めてから留学します。“Junior Abroad” といって、大学3年生で留学するのがスミス全体のカリキュラムになっています。学部によって異なるとは思いますが、ほとんどの3年生がどこかに1セメスターまたは通年で留学しているようです。大学院に行く率は、分からないですね<sup>16</sup>。

安東 大学院進学の場合、日本と違って、就職して何年か置いてから大学院に進むこともよくありますね。

高橋 そういうパターンも多いですね。

安東 直接大学院へ行く学生は、それほど多くないと聞いたこともあります。

高橋 そうですね。理系の学生は、直接行く場合が多いかもしれないですが、文系の学生では余り聞かないですね。1度どこかに就職する、あるいは私が所属している学部の場合は「日本ジェットプログラム (The Japan Exchange and Teaching Programme)」<sup>17</sup> といって、日本に行ってアメリカの文化を教えるなど、地域レベルでの草の根の国際化を推進することを目的とした日本の外務省が行っているプログラムなどに、1、2年程度参加して戻ってきてから、大学院に行くパターンはありますね。

安東 ALT (外国語指導助手) もそれに含まれますか。

高橋 そうです、ALT です。

安東 私の知っているアメリカ人は ALT として来日し、山形でもかなり田舎に行かされたようです。テキサスの人だから、初めて地吹雪なども経験をしたみたいです。日本での生活体験や学校での経験以外にも、蔵王でのスキーや温泉を結構楽しんだと言っていましたね。

高橋 そういう人がいますよね。田舎に行った学生は、みんな意外に、かなりいい経験をしているみたいで、そのまま残ったりする人もいますね。

安東 その他のプログラムもありますか。

高橋 大学独自のものは無いのですが、うちの学部の日本語プログラムでは、同志社大学と関係する“Associated Kyoto Program” というものがあります。アメリカのリベラルアーツ大学から学生が京都へ留学に行っています。その事務局が同志社大学の中に

---

<sup>16</sup> 大学院進学については、卒業2年以内に25%が大学院に進学している。就職数年後に進学する割合も少なくない。(https://www.smith.edu/topics/smith-success-stories)

留学については、「3年生 (Juniors) の半数近くがスミスのプログラムで留学する」(https://www.smith.edu/about-smith/smith-glance)、あるいは、「毎年40%近くの学生が、1セメスターか1年間の留学を行っている」(https://www.smith.edu/studyabroad/docs/2016-2017Guide\_MASTERCOPY\_000.pdf) との記載があり、多様なプログラムが用意されている。

<sup>17</sup> 「国際交流の業務と外国語教育に携わることにより、地域レベルでの草の根の国際化すること」を目的としている。平成28年には、40カ国から約5,000名が参加している。(http://jetprogramme.org/ja/about-jet/) (Sept.1,2017)



入っているので、同志社大学と交流があるということです。

安東 同志社が中心になっているということは、新島襄がこの近くのアマースト (Amherst) 大学で学んだというつながりがあるからでしょうか。

高橋 その通りです。

### 3. スミス・カレッジの強さ・長所

安東 先生は、ここに来られて13年ですね。様々に経験されてきた中で、他の女子大学や共学校とも比べて、スミスのもつ強さというようなものに関しては、どのように思われていますか。

高橋 例えば何を比べての強さですか。

#### (1) 入学者選抜

安東 一番顕著に数字として表れるのが、学生集めですが、この面ではいかがでしょう。

高橋 私の印象だとスミスは割としっかりやっている気はします。アプリケーション (志願) も毎年、結構増えているようです。アドミッション (Admission: 入学選考) においては、アメリカの女子大学の中でもスミスは非常に強いということは聞いています。

安東 U.S. News 社の大学ランキング (National Liberal Arts Colleges 2017) などを見ても、女子大学の中ではウェルズリー (3位) とスミス (12位) は別格ですね<sup>18</sup>。

高橋 アメリカの大学では、日本の大学と違い、学部の就職率でランキングを上げるというのは余りないと思いますが、スカラシップをもらう学生の多さ、例えば有名なものではフルブライト (Fulbright) で留学しているフルブライターの人数でランキングが決まったりします。スミスは結構、毎年多いです<sup>19</sup>。だからフルブライトなどのスカラシップをもらう学生の多さも、志願者へのアピールとして影響しているかもしれないですね。

安東 本日の午前中に行った Audrey Smith 副学長へのインタビューでは、学生募集の際に、女子大学であるということは強調しないと言われておりました。スミスの教員ス

---

<sup>18</sup> U.S. News の 2017 年度版リベラルアーツ大学ランキングの 1 位が共学の Williams、2 位は Amherst。女子大学では上記 2 大学に、Scripps 23 位、Barnard 27 位、Bryn Mawr 31 位、Mount Holyoke 36 位の順で続く。(https://www.usnews.com/best-colleges/rankings/national-liberal-arts-colleges)

<sup>19</sup> フルブライトに関しては、HP に採択率が掲載されており、全国の平均が 17% に対し、スミスは 44% となっている (2015-16)。過去 12 年で、183 名が採択されている。大学院進学については、卒業 2 年以内に 25% が大学院に進学している。就職数年後に進学する割合も少なくない。Law School 志願者の入学率は 89%、Medical School への入学率は 87% と非常に高い。(https://www.smith.edu/topics/smith-success-stories) (Sept.1, 2017)

タッフなり、学習環境なりがこんなに整っている、こんなに充実したスカラシップやプログラムが用意されている、こんな活躍している卒業生がいる、卒後にこれだけプロフェッショナル大学院に入っている、といったことを主張して学生を集めているとのことであって、女子大学だからということは、それほど強調はしていないとのことでした。Houseをはじめ学内諸活動において、女子大学では女性のリーダーシップを執る機会が多いなどとも言われますが、募集のときはそれほど宣伝しないようです。

高橋 そうですか。

安東 アメリカでは、女子大学を強調すれば、変に疑われたりするのですかね。

高橋 どうでしょう。でもおもしろいですね。多分スミスは結構ブランドとなっていて、名前もよく出ます。だから女子大学だと強調しなくてもいいのかもしれないです。もしかしたら、逆に今、トランスジェンダーなどいろんなことがあるので、女子大学ということ余り強調しないようにしているのかもしれないです。強調すると逆に、排他的にもなってしまうので、そういうイメージを出したくないのかもしれないです。

安東 そうかもしれませんね。6年前（2011年）、ボストンにあるシモンズ（Simmons）という女子大学で、学生募集担当のスタッフの方にインタビューをしたときにも、女子大学であることを強調しないと答えてくれました。むしろ、大学が伝統ある学術都市ボストンの街中に位置して、周りにこんなに優れた大学、企業や機関があって、そこでインターンシップや学習機会があることを強調し、なぜこんな素晴らしい機会を利用しないのか、といった言い方で学生を誘うとのことでした。立地を強調し、女子大学であるということは余り言わない戦略です。

高橋 そうでしょうね。でもそういう意味では、ここも、いろんな大学が周りにあって、5大学コンソーシアムという環境を強調することもできますし<sup>20</sup>、スミスがあるノーサンプトン（Northampton）という町も魅力があるというか、アメリカで住みたい小さい町ランキングで、毎年10位内のランクに入っているんです。

女子大学の学生集めが厳しいと言われる中で、スミスは本当にすごく頑張ってやっているといます。

## （2）資金集め／卒業生らの寄付

安東 例えばこんな数字があります。ここに持ってきたのは、毎年出されているEndowment（基金）の大学ランキングです<sup>21</sup>。2015年のリストでは、1位が

---

<sup>20</sup> 近隣のAmherst、Hampshire、Mount Holyoke、Smith、Univ. of Massachusetts Amherstの5大学が、Consortiumを形成し、相互の単位交換などを行っており、古い歴史をもつ。コンソーシアムに参加している5大学の間にはバスも運行され、無料で行き来ができるようになっている。(https://www.fivecolleges.edu/)

Harvard、2位がYaleで、この順位は長く変わらないようです。特にHarvardは\$36.4billion(364億ドル)と抜き出しています。全国的な、大学院をもつ総合研究大学(National Research University)も数多くある中で、Wellesleyが48位、Smithは51位に位置します。スミスの場合、基金の額は日本円で2000億円近い額となります。小規模な学部中心のリベラルアーツ・カレッジで、しかも卒業生が女性ばかりの女子大学<sup>22</sup>が、上位の総合研究大学と肩を並べるくらいの豊富な基金をもっているということですね。

高橋 本当にそうですね。

安東 共学のリベラルアーツ・カレッジでは、ウィリアムズ(Williams)が35位、アマースト(Amherst)が41位ですから、それらとほとんど差はありません。スミスの場合、今回のファンドレイジング・キャンペーン(“Women for the World: The Campaign for Smith”)で、2012～2017年の数年間に5億ドル近く<sup>23</sup>、日本円に換算すれば500億円以上を集め、目標を達成したのですから、有名な総合大学も顔負けです。

高橋 そうですね。女子大学でもやはり、そうした資金集めで上位に入っているウェルズリーとスミスは確かにすごいですね。

安東 他の有名女子大学ではプリンマー110位、マウント・ホリヨーク136位、バーナード245位とかなり落ちますから、他と比べると断然強いです。とはいえ、バーナードでも約3億ドル、日本円で330億円以上ですから、日本では考えられないくらい大きな金額です。このようにして集められた基金を利用して、施設の整備や学生向けスカラシップ、その他いろいろなプログラム援助などに反映されているのですね。手厚いスカラシップを用意することで、広く優秀な学生を集める強さもあるのだと思います。

高橋 そうだと思います。

安東 先ほど、何年か前にエンジニアリング専攻が作られたとおっしゃいました。これについても、立派な施設が寄付によって建てられたとお聞きしています。

高橋 エンジニアリングのメジャーが始まったのは2000年ごろかと思います<sup>24</sup>。履修者

---

<sup>21</sup> U.S.Aとカナダの大学のEndowmentランキングである。2015年度の1位はHarvardの約\$36.4billion、日本円では4兆円(1ドル=110円換算)。Smithは\$1.781billion、日本円で1,958億円であり、総合研究大学Georgetown大学の\$1.528billionよりも多い。(http://www.nacubo.org/Documents/EndowmentFiles/2015\_NCSE\_Endowment\_Market\_Values.pdf)

<sup>22</sup> 但し、スミスの大学院は共学となっており、数は少ないが男子学生も在籍する。

<sup>23</sup> 2017年2月21日付のニュースとして、2012年に始まったWomen for the World campaignの資金集めで\$486millionを集め、目標の\$450millionを達成したと発表した。(https://www.smith.edu/news/smith-college-announces-successful-campaign/)

も増えていき、エンジニアリングや自然科学系の新しい施設が必要ということで、リーマン・ショック (Lehman Shock) により経済が厳しい頃でしたが、自動車会社のフォードからの寄付などを基にフォード・ホール (Ford Hall) がすごい勢いで建てられたことを覚えています。財政難でお金がなくなっているというのに、あそこは資金があるからということで建ちました。

安東 外部からの寄付による資金はすごい規模ですね。Ford Hall と言い、最近のキャンペーンによる 5 億ドル近い寄付と言い、日本ではとても考えられないような大きな額を集めています。やはり、アメリカには寄付文化があり、特にこのようなプレステージの高い伝統校になると規模が全く違いますね。

高橋 きっと、卒業生も多いのではないですかね。

安東 Smith 副学長へのインタビューで、そのキャンペーンについても伺ったのですが、全寄付金額のうち、卒業生によるものが 50 数% だとのことでした。女性の方が寄付に寛容だなどとの記載もありました<sup>25</sup>。アメリカでは卒業学年で寄付額を競い合うとも聞いたりします。そうした資金を使用して、先ほどの建物もそうですが、様々な種類のスカラシップ、カリキュラムやプログラムの開発・改善に取り組んで、魅力づくりをしていくようですね。

高橋 やはりスカラシップをなるべく出して、家庭が貧しくとも優秀な学生や、ファースト・ジェネレーション (First Generation) といって、家族の中には大学卒業者がいないのだけど、自分が初めて大学生になるという学生、マイノリティーなど、いろんなエスニシティや社会階級の人たちを入学させようという趣旨の方針もあるみたいです。何しろ学費がすごく高いので、奨学金をもらわなければたいへんです。

安東 授業料だけで、日本円では 500 万円近くします。それに寮費も含めて全部支払えば、600、700 万円近くです。日本の医学部並みですからね<sup>26</sup>。

高橋 1年でこの金額ですから、日本の大学の何倍もします。奨学金なしでは厳しいです。

### (3) パイオニア精神／ロールモデル

安東 この他、スミスが頑張っている、すごいと思われるのは、どんなことでしょうか。

高橋 先にも言った、エンジニアリングの導入などがその一つだと思うのです。10年ぐ

---

<sup>24</sup> 2000年に20名のクラス履修者から始まり、2008年には100名に増加していった。Ford Hallについては、2007年に起工式があつて、2010年に完成した。(https://www.smith.edu/fordhall/overview.php)

<sup>25</sup> *Smith Alumnae Quarterly*, Spring 2017に掲載された学長スピーチ。(https://www.smith.edu/president-kathleen-mccartney/speeches/saq-spring-2017) どのような事業に使用するかについても書かれている。(https://www.smith.edu/news/smith-college-announces-successful-campaign/)

<sup>26</sup> 2017-8年の授業料は\$49,760、寮費は\$16,730である。(https://www.smith.edu/about-smith/smith-glance)

らい前だったでしょうか、アメリカが全国的にサイエンス（自然科学）を盛り上げよう、特に女性をもっとサイエンスの領域に参入させようという動きがすごい勢いで始まりました。スミスはそうした動き、潮流に呼応した感じがします。女性もサイエンスの領域にもっともっと参入して、女性のサイエンティストを育てていこうという考えがすごく大きかったと思います。リーマン・ショックのときは、スミスでも教授の数を減らしていっていましたが、理系は何も打撃がなかったですね。エンジニアリングを何とか軌道に乗せたかったからでしょう。

安東 10年ぐらい前ですか。日本では2010年前後からでしょうか、女子中高生の理系進路選択支援プログラムなどが実施されるようになり、リケジョ（理系女子）などという言葉が使われるようになっていきます。

高橋 そうですか。スミスでは10年ぐらい前から始めて、フォード・ホール（Ford Hall）<sup>27</sup>を建てまして、エンジニアリングであるとか、コンピューターサイエンス、生物化学、分子生物学などの分野で、女性のサイエンティストを育てるということを前面に出している面が強いと思います。

安東 先にも話題に出ましたが、その実現のためには、ファンド・レイジング（Fund-raising）は非常に重要ですね。

高橋 はい。大学は、全体的に本当にきれいに整備して、保っていると思います。

その他でいえば、新しい学長が来たのもそうですね。今のキャシー（Kathleen McCartney）さんが学長としてスミスに来たことは、本当に大きな話題を持ってきたと思います。彼女は、ハーバードの大学院の教育学研究科長（Dean of the Harvard Graduate School of Education）をしていた高名な心理学者<sup>28</sup>で、そのような人がスミスの学長に就任したというのはやはり大きなニュースでした。2013年のことです。

今も彼女は多くのメジャーな有力学術誌にも論文を書いています。そうしたことにしても、スミスの学長の名が出ていくということは、もすごくいい影響があるのだと思います。

安東 スミスの場合、これで5代にわたり女性学長が続いています。アメリカの女子大学の場合、女性の学長が多いようですが、Five Sistersのような優秀な女子大学でも、割と自校の卒業生ではない人を学長として選んでいますね。

高橋 そうなんですか。前のスミスの学長キャロル（Carol T. Christ）さんも、この大学の出身ではないようです<sup>29</sup>。キャロルさんは、最近カリフォルニアの今年のニュース

---

<sup>28</sup> ハーバードの歴史の中で、5人目の女性 Dean。（<https://www.smith.edu/president-kathleen-mccartney/about-president-mccartney>）

<sup>29</sup> 1966年、Rutgers University の女子大 Douglass College にて BA、その後、Yale 大学にて Ph.D. in English を取得した。（<https://www.smith.edu/president-carol-christ/biography>）

で、カリフォルニアの UC バークレー (the University of California, Berkeley) の高い地位<sup>30</sup>に、女性で初めて選ばれたといっていましたから、学長退任後も彼女は彼女でまたキャリアを進めています。すごいですよね。今回、新しい学長さんになった方も、学生にはロールモデルとしてもすごくいい影響を与えていると思います。

**安東** 学長に就任する方は、自分の在任期間に、レガシー (Legacy) のようなものを何か残そうと思って、いろいろなことするのではないのでしょうか。寄付をこれだけ集めました、新しい建物を建てました、こんな国際交流プログラム始めました、こんなこともやりましたなど、自分の荣誉というか、足跡を残そうとしている印象があります。学長を選ぶ理事会の側も、候補者がその大学の出身かどうかより、その人がどれだけこの大学に貢献してくれるかを重視して選んでいるようにも思います。そこも日本との違いかなと感じます。

学長として何をしたかが、HP などに掲載してある学長のプロフィールなどに書かれています。そうした、全米でもトップクラスの大物をもたらしてくることができるので、ある意味、スミスは別格なのでしょう。

**高橋** そうかもしれないですね。

#### (4) 授業のあり方：総合研究大学との比較

**安東** 次に、ソフトパワーと言いますか、教員についてはいかがでしょうか。教員の教え方といいますか、教員の意識のあり方のようなものですが。日本の場合、以前よりは随分改善されたとはいえ、どうしても研究に重点をおいてしまい、その空き時間に教えるといえば語弊がありますが、まだそういう意識は強いとは思いますが。

**高橋** やはりそうですね。

**安東** どうしても大学の教員＝研究者ということで研究への意識が強くなってしまいます。特に理系などは。大学教員の評価は、これまでずっと研究業績でなされてきたという伝統もあります。それに対してこちらの先生はやはり教育の側面にかなり力を注がれていますか。もちろん、教育と研究、どちらも重要なのでしょうけれども。

**高橋** 私は、大学によって色が違うと思うのです。スミスはリベラルアーツなので研究という色が余りないのですね。これが隣のマサチューセッツ大学 (Univ. of Massachusetts, Amherst) であるとか、ペンシルバニア大学のような大きな大学になると研究の色が

---

<sup>30</sup> 2013年に学長を退任したのち研究者としての出発地である Berkeley に戻り、2017年には UC Berkeley Chancellor に女性で初めて就任した。

U.C. Berkeley HP (<https://chancellor.berkeley.edu/chancellor-christ/biography>)

Los Angeles Times HP (<http://www.latimes.com/local/lanow/la-me-ln-uc-berkeley-new-chancellor-20170313-story.html>)



強くなると思います。教員もやはり研究重視になって、例えばテニユア (Tenure) の地位を保つために、あるいはプロモーション (昇進) するためには、研究成果のパブリケーションとして本を出したり、研究資金を持ってきたりしなければなりません。そういうことがある程度、プロモーションの鍵になってきます。もちろんスミスにもあるのですが、他の大きな研究大学に比べれば、余り強くないと思います。その代わりに、学部や大学にどれだけ貢献したかということの方に重きが置かれていると思います。

安東 ある大きな研究大学の学部授業ですと、ティーチング・アシスタントに授業をさせておくということもよくあるようですね。ですからアメリカの大学の授業はすごいというけれど、それほどではなく、博士課程やポスドクの若造が授業をやっているんだというふうなことを言う人もいます。

高橋 大きな大学などではありますね。

安東 そこが今言っておられたように、リベラルアーツ・カレッジと違うところですか。

高橋 全然違いますね。スミスでもティーチング・アシスタントが授業をすることもありますが、一つのコースを全て担当するなどということはありません。うちの学部でも、ティーチング・アシスタントも雇っておりまして、例えば日本語科の1年生と2年生コースでは、週5日の授業のうち、メインインストラクターが週3回教えて、ティーチング・アシスタントが週2回教えるというパターンをとっています。必ずメインの先生がいて、その授業の何コマかを担当するというかたちです。ただ、ダンス学部では、大学院生がダンスのクラスを担当するといったこともあるようです。授業は一人で教えますが、コース自体をアシスタント一人で担当するということはありません。

安東 ペンシルバニア大学では、ティーチング・アシスタントが教えることはありましたか。

高橋 あります。ティーチング・アシスタントの博士課程の方が教えたりするレベルがあり、コースがありますね。ですから学期を通してティーチング・アシスタントの人にしか会わない、教授の先生が何も教えないというコースもありますね。

安東 リベラルアーツ・カレッジと総合大学とでは、やはりそこに授業の質の差があり、小規模なりベラルアーツ・カレッジが評価されているところだと思います。

## (5) 基礎教育のあり方

高橋 私が、アメリカの大学院に入って最初に言われたのは、この国で成功したかったらまず“パブリック・スピーキング”ができること、それから“しっかり書けること”と言われました。ちゃんと人前で話せて、それでしっかり文章を書けるとこの国で何

とか職に就いてやっていけるという意味だったと思います。まさに大学の中で行っている教育内容というのは、“パブリック・スピーキング”、つまりしっかりと人前で自分の意見を言えること、それからもう一つはレポートなどを書くことです。ですから、どのクラスもすごく書くことに重点を置いています。レポートなどもそうですが、自分の意見をしっかりと書くということです。もちろん、英語力がないとだめなのですが、ただ、ずらずらと書いたのでは認められず、クオリティーがある自分のペーパーを書くということが大切なんですね。その上で、意見をコミュニケーションできるようにということが基本にあるような気がします。

**安東** 大学教育の基礎的方針として、そうした基準のようなものがしっかりあるのですね。アメリカの大学院を出て日本に帰ってきた方は、レポートの論理性や根拠、引用文献の書き方など、論文の作法についてはすごく厳しいですね。ああ、鍛えられていると思います。

**高橋** そうですね、しっかり鍛えられます。大学1年生のときから鍛えられていきます。入学したときからアカデミック・ライティング (Academic Writing) を叩き込まれます。スミスではジェイコブソン・センター (Jacobson Center) というライティング・センターがあります。この他、ライティングのクラスもあって、“ライティング・インテンシブ (Writing Intensive)” のクラスは、1年生でコースとして必修となっていて、全員が取らなければなりません。そこでとにかく書くことを覚えるわけです。

**安東** 私がジョージタウン大学で、ライティングの教育に関して尋ねたとき、英米文学、日本でいえば自国の言葉である国文学系の先生たちが、1年生に対して必須で教えているということを知って、驚いたのを覚えています。

**高橋** そうです、それに似ています。本当にそのままですね。

**安東** 日本でもそれができればと思いました。特に私どもの大学は学生数が1万と多いですから、難しいのかなとは思いつつ、そうした基礎を確実に身につけるようなことを何らかの形で行わなければならないと思っています。しかし、いざ実際にやろうと思うとなかなか真似はできませんね。

私の学生時代もそうでしたが、これから学生が学習し研究していく上での基礎のつくり方が、日本の大学では非常に弱いと思います。学生の自主的学習や、アクティブラーニングが声高に言われていますが、基礎がないまま行っても成果はどのようなか。よく大学院に入るところには、日本の学生はアメリカの学生に追い抜かれるなどと言われるのが分かる気がします。

**高橋** 学部1年生の学生を見ると、確かに高校の時からそれなりに意識の高い学生が入ってきているとは思いますが、やはりまだ何かホワンホワンしている感じがあります。最初の1学期目は本当に大変みたいですが、後半になると、だんだんとその辺

が鍛えられてくる感じがしてきて、2年目になると確かに鍛えられたなという感じがします。授業のペースであるとか、読む本の量やレポートなどを書く力、英語力、そういうのがみんな最初にすごく鍛えられるみたいですね。

安東 アメリカでは、学期前に大量の授業用の本を貸し出し、抱えきれないような大量の本を借りて帰って、学期の授業が終われば返却するという光景がみられますよね。

高橋 ここでもそうです。たくさん本を借りて帰って、学期が終われば返しに来てというパターンですね。

## (6) 卒業生 (Alumnae)

安東 先ほどのファンド・レイジング (Fund-raising) の話題でも出てきましたが、卒業生 (Alumnae)、つまり卒業生の大学への関わり方が、日本とかなり違って、大学や学生に大きく影響を与えているようにも思います。資金集めを通じた援助という側面だけでなく、スミスの卒業生と大学、さらには学生との関係、それらへの影響力についてはどのように捉えていらっしゃいますか。

高橋 本当に、卒業生がすごく強いですね。

安東 そうした卒業生が、学生募集や入学試験の一環としての学生インタビューもしてくれるというようなこともありますか。

高橋 そうです。卒業生がそれぞれの地域で学生のリクルートを結構やってくれているようです。卒業生にお願いするということもあります。大学にとって、大きなサポートの一つのようです。

安東 例えば、卒業生がジョブ・ハンティング (Job Hunting) など手伝ってくれるというふうに聞きます。以前、ウェルズリーで学生にインタビューしたとき、4年生のある学生が、別に就職なんかあまり心配していな言うのです。なぜなら、知っている卒業生に頼めば、高望みをしなければ何とかしてくれると言っていました。

高橋 そうでしょうね。きっと、何かコネクションがあるような気がしますね。それは何となくわかります。

安東 日本の場合、就職率で大学を選んだりするわけです。余り卒業生が親身にやってくれることはないようにも思いますね、特に女子の場合。就職活動の最初の段階で、OBやOG面接などはやってくれますが、その人のおかげで入れるということはまずありません。スミスなどの威信のある伝統校では、同窓生の力は格別に強いのかと思います。

高橋 スミスの場合、卒業生が大学に戻って来たりします。先にも言ったように、卒業式のあたりに戻って来たりするんです。今年は何年卒の学生が戻ってくるといった感じで招集をしたりもします。

安東 例えば“Reunion of 2000”などとして、ある年の卒業生が集まるのですか。

高橋 そうです、招集をかけるんですね。結構みんな戻ってきたりします。この小さな街が、スミスの学生と卒業生とでいっぱいになるんです。そういうのに戻ってくるというのはやはりすごいなと感じますね。大学に同窓生が来る機会も多いですし、一緒にパーティーなどもします。インターンシップなどもありますから、そうした機会を通じて同窓生とのつながりを作っているようです。皆、卒業生としての意識を非常に強く持っているといえましょうか。

## 4. 日本の女子大学とスミス・カレッジの比較

### (1) 女子教育に対する意識

安東 学生と教員という立場の違いがあるとはいえ、高橋先生は日本とアメリカ双方のトップにある女子大学の教育を経験されたわけですから。日本の大学との比較では、どんなところに大きな違い、差というものを感じられますか。

高橋 やはり差はあります。何でしょう。まず、大学の先生方の意識の差というのはすごくあると思いますね。私は日本女子大学で教えたことがないので、確信をもって言えることではありませんが、スミスの先生方というのはどこかで「女子教育」というものをすごく意識していると思うのです。どう言えばよいのでしょうか、女性を社会に出すことを大前提にして、どんな卒業生を育てたいかという意識を持って教えておられる先生が多いという印象ですね。おそらく、どの学部でもそうだと思います。

しかし、日本女子大学にいるとき、私は先生方にそういう意識を余り感じられなかったんです。もちろん先生によっては、平塚らいてうさんや、婦人解放運動のことなどを教えてくださった先生もいらっしゃるのですが、専門教育の中で、私なら被服学科という専門の中では、「女子教育」というものを感じたことはありませんでした。学術的・専門的なことはすごく教えていただいたのですが。

安東 そうですか。どうしても、専門的な知識が中心になりますかね。

高橋 知識はすごく入ったけれども、自分が女性であるという意識を、専門教育の中でつなげることは余りありませんでした。それがスミスでは、多分いろんなところ、いろんなものに入ってきているような気がします。ですから学生たちは、自分の専門ばかりではなく、進路やもっと全体的な指導の仕方も含めて、自分が女性であることをすごく意識しつつ4年間、育っていった感じがします。

安東 男性の先生についても、そういったことを意識していらっしゃいますか。

高橋 もちろんですね。男性の先生も多分そういうことを考えていらっしゃると思います。これは男性の先生にインタビューしたほうがいいかもしれないですね。全体的な集まりの中でみると、先生方の中には、共学大学では出てこなかったような雰囲気

あると思います。

安東 未来のことを語るなど、学生の将来のことを念頭におきながら今を考えることをしているといった感じでしょうか。

高橋 そうしたことだと思います。その将来というのも、女性が社会に出ていってもっと活躍できる、自分らしく活躍できる場所というものを作り上げることができる、そんな学生を育てているような気がします。それが日本とすごく違うところでしょうか。日本女子大学でもそういうことを考え、カリキュラムというか全体的な校風をつくることはできたかもしれないですが、余りなかったですね。もちろん、成瀬仁蔵先生の教育理念みたいなものがある、それは一応耳から入っては来るのですが、大学自体の校風というかカリキュラムに反映されていたかという、それはないような気がします。

それから、もう一つ違うのは、やはり学生の意識であると思います。

安東 どんなどころでしょうか。ここに入ってくる学生さんは、初めから意識の持ち方が違うのか、あるいは大学の中でつくられていくのでしょうか。

高橋 わかりません。初めからも違うとは思いますが、4年間でかなりつくられてくると思います。先生方は、どうやったら学生が自分の意見をしっかりとと言えるようになるかということを意識して教育しています。もう一つは、学生の意見をよく聞いてから、先生が自分の意見を言うというように、学生の意見をどう引き出すかということ、先生方がすごくよく考えていらっしゃるような気がします。

安東 日本の場合、教員はしっかり教えて、知識や技術を身につけさせて何ぼというか、そういう意識が強いのでしょうか。

高橋 そうですね。どちらかという上から知識を与えていく感じがするのですが、この大学にいと、どちらかという先生方との話し合いというのは、学生からどう引き出すかという方向で行っているような気がします。

安東 そういふに議論して、自分が思うことを言えるようにしていこうというというのは、アメリカの教育観とか人間観からくるのでしょうか。むしろこのスミス大学がそれを強調しているということなのでしょう。

高橋 後者かもしれないですね。それは理念というか、伝統というか、上から来ているものがあるんですね。大学にはこういう学生を育てようという理念があって、それに見合う学生を育てよう、そのためには、どのようなクラスで、どのようなことを教えたらいいか、どんな教え方をしたらいいかを考えるようにさせられているのかもしれないですね。

## (2) 大学卒業後に描く女性の将来像

安東 先ほど言われたように、日本の女子大学の教員というのは、将来に向けてどんな女性を育むかという意識が弱く、女子だからということ意識せずに教育している。むしろ、女子ということ意識しない方がいいんだというところがあるようにも思います。たまたま、大学教員として職を得たのが女子大学であったわけで、性別に関わりなく同じように教えることこそが平等であり、学問には性別など関係ないんだといった意識がある。私もそうかもわかりません。

高橋 そうですね。例えば津田梅子さんが津田塾を始め、成瀬先生が日本女子大学校を始めた頃の教育と今の教育とでは、かなり女子教育に対する意識が違いますよね。もちろんその時代に高等教育を受けに行った女子学生と今の女子学生では、かなり意識が違うと思います。そういう意味では、もしかしたらミスは創設当時の意識をまだもち続けているのかもしれない。割とそのまま伝統としてつなげてきている可能性が高い。それに対して、日本は多分どこかでそれが薄れてきてしまったのかもしれないとも思います。結果的に、今日の女子大学でどんな教育をしたらいいかというものが変わったのかもしれないし、逆にそれを出すと学生が鬱陶しいと思って女子大学にあまり来ないのかもしれない。日本の特徴は、学生が大学を、就職するためのスプリングボード（手段）のように捉えていることかなと思うのです。大学の4年間、女子大学に籍を置いても、やはり就職することに主な目的があるので、女子としての教育を受けるというのも余りないのではないのでしょうか。

安東 そうですね。学生、特に女子学生が大学を選ぶ主な基準は、就職と資格ですからね。

高橋 そう、資格と就職ですね。

安東 日本の場合、戦前の女子教育はやはり圧倒的に良妻賢母が強かったです。

高橋 はい、日本女子大学もある意味、良妻賢母でしたね。

安東 そういう形で、割と戦前の女子教育のイメージというのははっきりしていて、伝統と近代が折衷した形で、女性はこうあるべきというのがありました。有無を言わせない形で。それが二次世界大戦後、かなりの程度、壊されていきました。戦争が終わってアメリカ軍が進駐してきて、そういった昔の考え方はよくないということでやられたときに、じゃあどういう理想、どういう女性像を描いていいのかということがなかなか見出せなかった。昔のことを言ったらまた叩かれる。女性が大学に進学できるようになり、女子大学もできたのですが、女子大学が目指す確たる女性像をもてないままに今日まできているといった感じでしょうか。

高橋 戦争の時代には、結構女子が外に出ていってもよかったらしいですね。でもそれはある意味、階級的には上の階級の家柄の女性でした。例えば御主人が軍関係であった



り政治家であったり、そういう女性が外に出て行って、そしてお国のためにというアイデアを持ってきて、ほかの女性に影響を与えるというか、そういう意味の女子教育みたいなものもあったと思うんです。それが戦後崩れたというのでしょうか。確かに、おっしゃるとおり、女性像が持てないということはあるかもしれません。

**安東** だから何もなくニュートラルなものを教えて資格を取らせ、就職をさせる。教える内容としては英文・国文や家政、就職でも“女性用の職業”ということが続いていきました。私どもの女子大学は、そうした傾向が強くて出ていて、就職なり取得できる資格を売り物にして学生を集めてきたという側面があります。ある意味、これが成功してきました。昔は、良妻賢母、さらにはお国のための銃後の守り、銃後の女性といった位置づけでしたが、戦後突然それらは否定され、価値観が変わってしまった。それに代わって女子学生に用意されたのは、一方で教養教育、もう一方で資格や就職になっていき、ではどういうふうな理想の女性の形を描くのかということに非常に苦慮していると思うんです。

**高橋** そうかもしれないですね。スミスで教えていると、この学生たちは多分、結婚とか出産とかに関係なく生きていこうという気がすごくするんです。でも日本の女子大学にいたときは、ここで勉強していて卒業して就職しても、多分、結婚と出産があれば、「ああもう終わるのかな」という感じがしましたね。

スミスの学生たちは結婚、出産があっても、ここで培った女子力みたいなものをそのまま続けていけそうな感じがするのですが、それが日本の女子教育に余りないのかな。日本の場合、卒業してまず就職することが大切であり、あとは資格が大切ということで、とりあえず4年間は終わるという感じですね。

**安東** そこから先の自分のイメージが持てない、あるいは持つことが難しい。一生通じて考えると、結婚して子どもを生んで家に入るかどうかという辺に閉じてしまって、この仕事をずっと続けるという意識の人はあまり多くなかった気がします。そうした意識を持てない、モデルもなく持ちづらいといいたいでしょうか。

**高橋** 難しいです。社会もそうですからね。やはり社会の違いもありますし。

**安東** 一旦職場を去れば、なかなか同じレベルでの職場復帰は難しいのが現状です。

**高橋** そうですね。アメリカもちろん女性の社会復帰はすごく大変なのですが、何かスミスの学生とかになると、割とそこが強い感じがします。もしかしたら子どもを産まない人もいっぱいいるのかもしれないのですが。

**安東** どのような理想、どのような女性としての生き方を求めているのでしょうか。

**高橋** 割と1人の人間としての生き方というか、自分を見ている感じがするんですよね。女性である前に1人の人間としてどう生きるかが基盤として植えつけられているような気がします。日本の女子大で、カリキュラムの中にそういう1人の人間として

の考えを映かせるといったものが余りないのかもしれないですね。個人的な体験からですから、そんなに批判的に何だかんだとは言えないのですけれども。

安東 先生が先ほど、スミスでは昔から“女性のイメージ”が変わっていないんじゃないかというふうに言われていたのは、具体的にはどのようなことですか。1人の人間として独立して、個人で立ってやっていくんだといったことでしょうか。

高橋 そうしたことだと思います。女性像というのではないのかもしれませんが。スミスの学生たちを見ていると、結婚などのライフイベントがあるかもしれないのですが、それによって自分が変わってしまう感じがします。変な言い方ですが、キャンパスに帰ってきてくれるアラムナイ（卒業生）たちを見ていると、何かこう、結婚しても子どもが生まれても自分を貫いていくという感じがするんです。

安東 昔の卒業生たちは、やはり家庭に入る人が多かったですね。

高橋 多かったと思います。レーガン (R. Reagan) 大統領のナンシー夫人 (Nancy Reagan) やジョージ・ブッシュ (G.H.W. Bush) 大統領のバーラバ夫人 (Barbara Bush)<sup>31</sup> もスミスの出身ですが、結婚後は、家庭に入る方もすごく多かったと思います。だけど、みんな家庭に入ったとはいえ、そこで終わらないという感じがします。地域活動やボランティア活動をしていくなど、何らかのかたちで自分の活動場所を見出していくというように、強いものをもっている感じがするんです。

安東 あなたは他の誰でもない、あなた自身なのだから、自分の持っているものを大事にしないで、自分を出さないといった感じでしょうか。

高橋 そんな感じがしますね。結婚する、子どもを持つことでは終わらない感じがするのでしょうか。〇〇ちゃんのお母さんという感じにはならない。私も母親になって思うのですが、日本では割と母となった女性たちは自分の名前を失ってしまうと言いましょうか、何とかちゃんのパパとか、あとは何とかさんの奥さんみたいになってしまいます。スミスの学生にはそれが無いような気がするんです。そのまま自分の名前を通していくように思います。それが違うのでしょうか。うまく言えないのですが、消えてしまわない芯のようなものがある感じがしますね。

だからと言ってすごくフェミニストみたいな強い感じはしないんです。何かこうもう少し柔らかい感じがするんです。本当にいろんな学生がいますが、みんな、強い芯を必ずどこかに持っていると思います。

---

<sup>31</sup> Barbara Pierce は、G.H.W. Bush との結婚のため、2年で Smith College を去っている。  
(<https://georgewbush-whitehouse.archives.gov/history/firstladies/bb41.html>)  
(<http://www.nytimes.com/1990/05/04/us/at-wellesley-a-furor-over-barbara-bush.html>)

### (3) 日本での女子大学生活を振り返って

安東 先生はアメリカに來られて何年くらいですか。

高橋 1996年に來たので、もう21年です。もう自分の生きている半分以上はこっちになってきました。だからといって私はアメリカ人だとは思わないです。今も日本人だとずっと思っています。

では、私の生き方は日本女子大学でつくられ、フェミニン意識が芽生えたのかと言われると、そうとも言えないですね。ただ本当によかったのは、日本女子大学の4年間、やはり女子だけの中にいたのはよかったと今、思います。ある意味、自分のことに集中して考える時間があったことと、寮生活でしょうか。日本女子大学時代の私は、伝統の寮で育ちましたが、寮での生活というのは、平成の時代に大学にいたのですが、昭和の時代のルールの中に少し浸かっていたようなものでした。そういう意味では本当にすごかったんですよ。

安東 掃除当番、門限、寮の係などのルールや自治会などですかね。「おかしいな」と思うことがあっても従わなければいけないですからね。

高橋 そうですね。

そういえば先日、日本女子大学からある教授が、成瀬仁蔵先生の足跡を調べにいらしたんです。それで、成瀬仁蔵先生もスミスに來ていたことが分かりました。

安東 そんな記録がスミスにあったんですか。スミスの創設(1871年)後、間もないころでしょうか<sup>32</sup>。

高橋 そのようですね。日本女子大学の形態自体がすごくスミスに似ているんです。スミスの学生は皆、キャンパスの中のハウスに住んでいます。そうしたキャンパスの中のハウスを、そのまま同じような形で日本女子大学のキャンパスの中にもっていった感じらしいです<sup>33</sup>。

安東 女子大学を日本につくろうとしているわけですから、アメリカのいくつかの女子大学を見て回っていたんでしょうね。

高橋 そうみたいです。やはりこの辺には、最も歴史のあるマウントホリヨークもありますから、もちろんそこにもいらっしやったと思います。様々な女子大学を回って、それを大いに参考にして、日本女子大学をつくったんだと思います。

---

<sup>32</sup> 成瀬は1890年から1894年1月に帰国するまで3年余り、女子教育機関のみならず幅広く学んでいる。(島田法子 2010, 「日本女子大学校創設とアメリカ」『Studies in English and American Literature』No. 45, pp.6-78. など参照)

<sup>33</sup> 日本女子大学校の創設前、成瀬はマウントホリヨーク、スミス、ウェルズリーといった女子学校を訪問し、学寮なども視察したようである。日本女子大学の学寮及びその設立過程については、次の本が詳しい。日本女子大学学寮100年研究会編 2007, 『女子高等教育における学寮：日本女子大学学寮の100年』ドメス出版

安東 先ほど、寮生活は「本当にすごかった」と言われましたが、今、その経験をどのよう捉えていらっしゃるんですか。

高橋 今振り返ると、そのときの寮生活での体験は、すごく自分をつくってくれたのだと思います。例えば、いろいろな矛盾も出てくるわけですが、その矛盾とどうやって折り合いをつけていくかといったことであるとか、そういう場所でも生きていける、やっていけるような強さというのは寮で学んだのかもしれないですね。

あとは、女子だけで様々なことをやっていたのはよかったと思います。変に男子がないので余分なことは何も意識しない。自分の勉強であっても、何でも、気になるもの、好きなものは、周りを気にしないで一生懸命打ち込めるといえるのでしょうか。そういう意味では女子だけの生活を経験できたことはよかったです。

それから、いろいろな女子に会えたこともよかったですね。同性の女性ばかりに囲まれていると、「ああこんなに女子っていろいろな女がいるのか」ということをすごく実感できました。私もそうした多様な女子の中の1人なんだということを感じられたのは幸運でした。そういう環境の中に4年間、身を置いたことはたいへんおもしろい経験でした。

私はやはり、今も女子大学は好きです。卒業してみると、ああ卒業してよかったなと思います。本当に貴重な4年間でした。

安東 女子学生も女子大学に一旦入ってしまえば、気楽で楽しくも思うようですし、卒業してからも女子大学でよかったと言うのです。先程インタビューをしたSmith副学長も同じことを言われていました。しかし、それまでほとんどの学生は共学での教育を受けてきていますから、入ってくる際にやはり敷居が高いというか、意識上の壁を感じるようです。ですから女子大学の売りとしては、先ほど言ったように就職や資格、あとは校舎や施設がきれいだとかをアピールして、女子学生にきてもらうようにしようとしている。もっとこんな教育をしています、先輩たちは後々に残るこんな経験を女子大でしましたということも、ある程度は伝えようとはしていますが、教育や経験の中身をアピールするのは、なかなか難しいです。

高橋 やはり、学生の心にも響かないといけないと思いますが、社会からの一貫性がないと、なかなか大学のカリキュラム自体を変えていくような教育理念にはなっていないかもしれないですね。

安東 今の日本の女子大学で、アメリカのこういうスミスのやり方を真似できるようなことがあるのかなと思ってしまいます。歴史も社会や文化の状況も異なりますからね。

高橋 でもどうでしょう、どっちがどうとも言えないですからね。私は日本女子大学にいたとき、ちゃんと女子大学をつくって、それをずっと続けているのはすごいなと思いました。今も時々昔の教授に御挨拶に伺ったりもしますし、日本女子大学の卒業生

ですから「大学通信」なども届けられるのですが、やはり女子だけの大学を、女子教育をちゃんと受け継ぎ、継続していているのはすごいと思います。

例えば、ロールモデルとして、卒業生にこんな人であるとか、近況報告であるとか、そういうふうになんと続けているというのはそれはそれですごくいいことだと思います。

スミスはスミスで生き残りをかけて、共学と変わらぬ教育、共学以上の質の高い教育を施すために、ファンド・レイジング (Fund-raising) やアラムナイ (卒業生) との連携、施設やカリキュラム・プログラムの充実、奨学金の支給、5大学のコンソーシアムをはじめとする他大学とのコラボレーションなど、あらゆる手段をつくして、頑張っていることもあるので、どっちがどっちとは言えないと思うんです。

**安東** 安易に真似ができるものではありませんし、社会の伝統や文化も大きく異なります。そうした違いを認識しつつ、やはり女子大学として共通することもたくさんあると改めて感じました。

特に今日のお話では、女子学生に対する期待、教育のあり方については、大いに学ばなければならないと思いました。今後とも、ご教示を願えればと思います。お忙しい中、誠に有難うございました。

**付記** 本研究は、2015～2018年度・科学研究費助成事業（基盤研究C）「女子大学の存立意義に関する比較研究：日本・アメリカ・韓国の比較研究」（課題番号15K04327）による研究成果の一部である。